



TITLE:

花山だより (プラネタリウム特輯)

AUTHOR(S):

---

CITATION:

花山だより (プラネタリウム特輯). 天界 1937, 17(191): 199-199

ISSUE DATE:

1937-02-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167425>

RIGHT:

## 花 山 だ よ り

◇本年に入つて連日の悪天候で、観測夜は頗る稀であつた。唯太陽の悪戯か、例年の様な寒さもなく、水飢饉も無い。今日、2月9日は久し振りに晴れ渡つて「4月の太陽」が和やかに照り、太陽館の風信器が緩慢な廻轉を續けてゐる。全く幸福に満ち充ちた花山の一日、唯今、愈々廣島縣沼隈郡瀬戸村臨時黃道光観測所に出張する荒木健兒氏の送別會が考へられてゐる。

◇過日兵庫縣某氏來臺、夏至に某地で太陽の蔭の長さを計つて、太陽視差を決定する方法を提案されたが、堂々語る氏の宇宙論を御紹介しよう。空の色の青いのは、地球の外側が或擴がりて水に滿されてゐる爲めで、これが爲め月は其の中に突入して盈虚の相を示し、月は固體で其の證據に掩蔽を觀測して恒星が月面から撥ね返されるのを見たと。轉回説があれば「老人星」迄。此の種の新説が殆んど毎月天文臺に來るが、中には親切に地震の豫報を送られ後に恐縮して前言取消、天下安泰と云つた篤志家も居られる。唯其の獨創と眞剣さには敬意を表したい。——全く鵜呑みの世の中ではあるが。

◇各國の天文臺出版物を見るに、各方面に徒らに流行を追はず、奇を求めず、新舊取交せて種々の報告、發表が載せられてゐる。中には數十年に渡る觀測の整理、老大家の研究續報、又未完成の試みもあれば新進の論文等、全く全世界を打つて一丸とした精進に頭が下がる。中には大巖石を一撃の下に破碎する天才もあれば、其の破片を丹念に掻き集めて分類する者、破片の分析に餘念の無い者もある。高所に立ちて四圍の景觀を觀賞する人も、又山を分けて共に楽しむ好學の士もある。何れもなべて、海邊の小石拾ひではあるが、眞理の大空は大古の神祕を未來に祕めて、—— 艦がては此の手も落ちる——大空の枯れる如くに。だがフランシス・ジャムの驃馬の様に泥にまみれ、子供の嘲笑を浴び、只管に黙々と歩む聖者の姿こそ望しい。ハラワタは燃え目は眩む大空への「あくがれ」こそ星見る人の喜びであらう。屋内には暖かに焚火が燃えてゐる。元氣に満ちた顔も、疲れ果てた顔も見える。諸君、膝を交へて、この短夜を語り明かさうではないか。(2月9日 老人星記)